

アフリカ飼料草採集紀行 (2)

農林省草地試験場 育種第1研究室長 宝示戸 貞雄

ホレタ農業試験場

エチオピアには全国6ヵ所に国立農業試験場があり、首都の農業研究所が本部になっている。ホレタはアジスアベバから南へ50 kmで最も近く、また飼料作物研究室のある唯一の試験場である。12月2日、農業研究所から毎日往復しているバスに便乗して訪問した。

牧草担当者アト・アスタケ氏の案内で試験場を見せてもらったが、アルファルファが灌水さえすれば良くできるのは温和な気候から当然であろう。ペレニアルライグラスで良い永年草草ができるが出穂しないというのも、低緯度ではもっともである。大規模にかん漑工事を行ない近代的農業を営むモデル農村的事業が、リフト・バレー南部でスウェーデン、フランス、米国などの援助で進められているが、一般農家まで牧草栽培が普及されるにはまだまだ年数がかかる。一般農家はテフ、小麦、大麦、そらまめ、ヌグ(キク科油料作物)などを3年から5年くらい栽培しては、以後3~4年休閑するのが普通で、肥料はまず使わない。というのは今回訪れた他の国でも似たようなものである。作物研究室では小麦、大麦、テフ、ヌグの育種のほか、病害虫防除試験まで一手に引受けていた。なお、テフはエチオピア穀作の50%近くを占める重要作物でカゼクサ属。ウィーングラブグラスと同属であり、他の国には全く見られない珍しい作物である。ここでは、野生のビシア属(ベッチの仲間)も採集できた。

青ナイルから北方への採集旅行

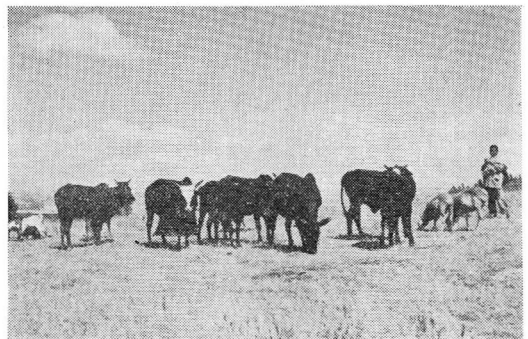
12月5日朝7時アジスアベバ発。最初の目的地デブレマルコスまでは300 km、7時間のバス旅行である。途中、高原台地を侵食して流れる青ナイル(ナイル川の上流)の大峡谷を通過する。海拔2,000 m余の高原から1,100 mの川すじまで、下るにつれて気温は上り帯熱の暑さが襲ってくる。したがって人家は峡谷の上部に限られ、畑も上から500 mくらいまで。以下はトゲのかん木に葉をすっかり落した10 mほどの奇妙な木、草もナイジェリアでなじみの丈高いハイパルヘニヤなど、全く利用されてない荒涼たる風景となる。青ナイルの水もやは

り褐色に濁っていた。

再び峡谷を登り切った小さな部落での昼食はインジェラ。これはテフの粉を水でゆるく練って醗酵させ、鉄板上で直径50 cmくらいに薄く焼いたホットケーキ状のもの。味はスッパイ。副食は鶏やモツ。塩とトウガラシ味の、日本でいわば「煮込み」である。珍客におかずの皿を途中で取り替えてくれるサービスつきで50セント、僅か70円であった。

デブレマルコス：近代的な建物も商店らしいものもほとんど見られない町。小さなホテルの小さな部屋を確保して採集に出る。2 kmの近くにある飛行場は家畜を入れないために見事な草原になっており、ここでも数人の子供の手伝いでよい採集ができた。空港といっても比較的傾斜の緩やかな丘の草原そのままであり、1日1便の飛行機は着陸すると凹地に機影を没し、やがて爆音と共に丘を登って事務所前に姿を現わすことになる。ホテルの夕食はまたインジェラ。しかし、バーでビールが飲めるので助かった。翌日バハールダルに向った飛行機は、日本ではもう見られないDC3型。お客は貨物の間に混載の状態であった。

バハールダル：青ナイル源流、タナ湖畔の平野の町。海拔1,830 mでかなり暑い。ホテルからフランス人夫妻客と同乗で青ナイル滝へ。車で1時間足らずの所にある。途中見たフィンガーミレット(日本のシコクビエ)は栽培種と野生種の間型か。エチオピア内どこでもそうら



エントト山の放牧家畜

しいが、ソルガムのような大型穀物でさえパラ播き栽培。黒い穂、赤い穂、白い穂とどの作物の畑も見事な混生状態を示し、これは人為による選抜乃至は淘汰がほとんど行なわれていないことを意味し、研究材料としては興味の尽きぬものである。

青ナイル滝：入場料は不要だが、車を降りるとすぐに案内人に取り囲まれる。最初の案内人は100mほど崖を下った吊橋まで。その先は別のグループの持分で交替し客3人に案内人も3人。うち1人は旧式な鉄砲をかついでいる。野獣はヒヒくらいのもらしいが繁みがザワつく。女子供は襲われることもあるとか。滝は幅300m以上にわたっていようか、いつか絵葉書かテレビで見た通り壮大なものであったが、滝のしぶきによる霧が潤おうため草の生育も見事であった。採種には若過ぎるうらみはあったが、種類も豊富で種子採りと写真撮りとに忙しいことであった。日没後ホテル帰着。タナ湖での採集は断念し、翌早朝のバスで次の町ゴンダールに向かった。

ゴンダールからマッサワまで：ゴンダールは古城の町、昔の都である。マーケットで穀物を買ったほか町外れの高さ100mの山に登って採集した。植物体は食い尽くされて見えないが地上にこぼたれ種子はウマゴヤシらしく特徴あるトゲの莢。これなら山羊も食べなかったものと見える。

ラリベラは海拔2,900mの山上の町。古代キリスト教の聖地で岩山を掘り抜いて作られた教会で有名。飛行機でしか行けない陸の孤島である。アクスムはシバの女王の古都。いずれも1泊ずつ。どこも草はほとんど食い尽くされていて収穫は乏しかった。北部エリトリア地方の近代的大都会アスマラから、紅海沿岸にあるエチオピア唯一の港町マッサワまでは115km。ただし、この間は反政府ゲリラが出没するとのことで警戒は厳重を極めていた。まず、その間の通行許可証を得るために半日。翌早朝発のバスは途中5回の軍隊による検問。いちいち全乗客を降ろしてボデータッチという物々しさであった。苦勞してたどり着いたマッサワは対岸のアラビヤと同様に砂漠の中の町。港近く浮かぶマンダローブの緑の小島、

全く汚れを知らないテーブルサンゴと白砂の遠浅の海と実に美しかったが、暑さもまた格別であった。草も予想通り見るべきものなく、むしろ興味は2,300mのアスマラから0mの海岸砂漠に下る間の植生の変化にあるばかり。夜半、北空に久し振りで北斗七星と北極星とを仰ぎ見た。翌朝、話のタネにと紅海で一泳ぎしてから帰途に着いた。

12月13日空路アジニアへ帰着。14,15日と南方260kmのアワサ湖へ採集旅行。16日には農業省で種子の植物防疫検査を受けて資料と共に日本向け発送。17日はアジニア大学の構内でダクチリス属(多分オーチャードグラス)の数株を発見採種できた。18日空路ケニアに向かった。

ケニア その1

「ジャンボ！」ナイロビ空港の出入国管理官はニコニコと愛想が良い。税関もフリーパス。おまけに空港までジェットロの永田秀治氏のお出迎えを受け、とかく緊張する入国第一歩もナイロビではご機嫌である。雨もよりの曇り空も、ラゴスのスコール以来1ヵ月ぶりでは、いささかの情緒さえ感じられる。空港から市街までの道沿いは早くも広々とした草原である。樹木が極めて少ないから遠望がきき実に広い。到着その日のうちにご案内いただいたナイロビ国立公園である。心配していた草の生育ステージは、多くの種類で出穂始めであった。ナイジェリ

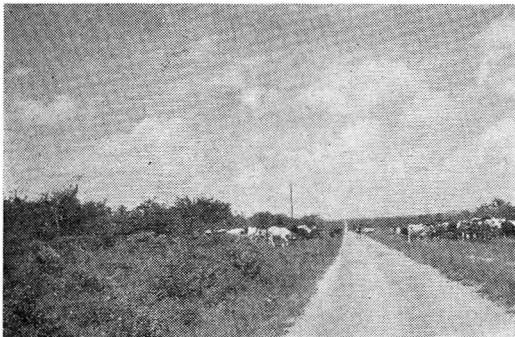


エンブ農試の牧草試験圃(ケニア)

アとエチオピアとは11月から12月がほぼ採種適期であったが、赤道直下から南半球に入る東アフリカ3国では大分事情が異なっている。同一国内でも当然地域差は大きい、ナイロビを含むケニアの東半からタンザニアの東半にかけては、年間に大小2回の雨季があり、1、2月は小雨季と大雨季との間にあたっている。草の採種の最適期は6、7、8月頃だが、1〜2月もそれにつぐ適期と期待してきたもの。それにしても12月中では早過ぎる。穂が見られなかったら草の同定も覚束ない……という心配は、まず一安心であった。

ケニアはインド洋岸に北緯5°から南緯5°まで58万km²。人口1,100万、肉牛670万、乳牛48万、山羊・羊900万頭と推定されている。中央からおよそ西半分は海拔1,300m以上の高地で、雨量も比較的多く温和な気候に恵まれ、主要な農畜産地帯となっている。高温多湿な熱帯雨林地帯は東海岸のモンバサ付近に限られ、国土の60%を占める東北部の低地は乾燥したステップ乃至は砂漠で、利用も微々たるものである。

それで、調査旅行も主に高地を対象と考えてきたが、さて、広い国内をどんな順序で回ったらよいか。一級国道でも長距離バスは日に1、2本しかない、訪問先の都合もある、となつては、日本で作ってきた旅行日程どおりとはとてもいかない。まず、現地の日本大使館を訪れ、農業省などで日程を調整し、行く先々に連絡願ってから行動に移るのが常道である。しかし、12月18日(土)



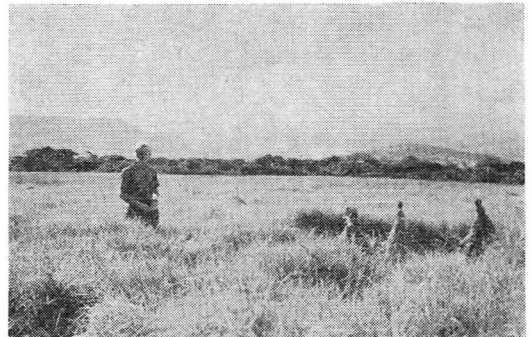
マサイ族の牛(ケニア)

到着というのははなはだ都合が悪かった。つまりクリスマス休暇である。結局、農業省を訪れたのは年を越した1月3日。それまでは、ジェットロ、大使館など現地の方々のご助言ご助力によって旅行することになった。

ケニア山地方

12月21日、日本大使館提供の大型ジープ(トヨタ・ランドクルーザー)で北方約200km、アフリカ第2の高峰ケニア山麓をめざす。途中何回か車を停めるが、パニカム・マキシマム(ギニヤグラス)、ソルガム、セタリア、サイノドンなど良質草がかなりあるものの、ほとんどが出穂直後か開花中でまず種子は望めない。それでも確認のためにと穂の採集だけは行なった。種子を容れる紙袋は、リュック1つで歩くには普通の封筒では大き過ぎる重過ぎる。町に適当な既製品も見当たらないので、夜なべに自ら袋貼りした小型のもの。あとで種名を確認するためには丁寧な標本採取が希ましいが、目的からすると点数を多く集めるのが第一、種類のみきわめは日本で播種して育ててからでもできると、種子は穂からしごきとっては袋に詰めた。その点、未熟の穂はまことに困るが、1回の旅行でどこへも適期に行けるものではない、と割り切る。

午後、エンブ農試訪問。名刺1枚持って突然の訪問はもう何回もやってきたこと。しかし、こんな目的で日本から来たといえ、どこでも気持よく迎えられた。特に黒い人達の示してくる親しみは、すっかりアフリカ焼け



ケニア種子会社のローズグラス圃

したこちらの顔色のせいもあったろうか。実取りトウモロコシへの牧草中播きなど、試験は場案内と種子分譲を受けて2時間で辞去した。

雨の中を赤道を越えメルーの町を過ぎると、道はケニヤ山の北麓を海拔2,900 mまで登る。いわゆるホワイト・ハイランド(昔、英国人入植者が気候のよい高原地帯で近代の大農場経営を始めた)の一角で、広々とした美しい草地に牛、羊の群が放牧され、小麦、エンバクなどの畑はまだ草丈15 cmくらい。草はブロムス、フェスッカなどがローズグラス、アンドロポゴンなどの熱帯草と混在し、成熟期に近いものも得られた。日暮れは近い、仕事は簡単。運転手君にもケニヤシロクローバの採種をしてもらった。

山を4分の3周したナニユキで1泊。翌朝は晴れて待望のケニヤ山(海拔5,202 m)の姿を見られたが、残念ながら真東の逆光。写真撮影のチャンスを得ぬ間に再び雲に包まれてしまった。往路と違った道を採集しながらナイロビ帰着は15時頃であった。

ウガンダ

翌23日ナイロビから隣国ウガンダの首都カンバラに戻る藤田豊氏(OTCA)の車に便乗して西北へ。途中ナイバシヤでは路傍に木彫りの動物、人形を製造販売する小屋がけが10軒ばかり。当初はみやげどころではなかったが、旅行も3分の2近くを消化して気持ちにもゆとりができ、10点ばかり購入する。いい値の半分につけて6~7割の所で買うと、売り手、買い手ともに満足のいく値段となった。フラミンゴの大群で名高いナクル湖にも立寄り、ホワイト・ハイランドを走り濃霧の中をケリチョに到る。この日の走行270 km。普通なら半日の行程である。ケリチョは茶の産地。英国風の落ち着いたティー・ホテル泊。背広を持たないのでちょっと困った。

翌日、世界第2の湖ビクトリア湖畔のキスムを経てウガンダに入る。夕刻、ジンジャの町でビクトリア湖から流れ出るコロムビヤナイルの瀑布(今は発電ダムになっている)を見てカンバラに到着した。これでナイルの

2大源流を訪ねることができたわけ。この日500 km。やや疲れたのでXマス・イブの食事は省いて胃を休ませた。

マーチソン・フォール国立公園

歴訪した5ヶ国のうちで、ウガンダは最も小さく24万km²。人口860万人。牛360万頭。国土の大部分は1,200 m前後の高さでケニヤの高地より低く、また暑い。短期間ではとても多くの地方を見ることはできないが、第一の調査旅行は藤田氏のご助言でマーチソン・フォール国立公園にした。幸いナイロビから同行した加藤氏と一緒に運転手つき自動車(コロナ)で1泊2日のコースをとった。

この国立公園はカンバラの北方300 kmから、南北60 km、東西90 km、神奈川県に近い3,100 km²の面積は東アフリカでは中の下クラスの規模である。国立公園内の人の居住は厳重に制限されているから、多数の家畜で過放牧されている一般地域にくらべて草生は一般に良好で、採集地としては見逃がせない所である。ビクトリア湖の北岸のカンバラ付近は年降雨量も1,500 mmくらいあって、部分的には森林もあり、草も雄大なエレファントグラスやギニヤグラスが目だが、北西進するにつれて森林は急速になくなり、国立公園内はハイバルヘニヤを主とする典型的な長草型サバンナとなっている。

折から野焼きの時期で、一望冬枯れ(?)色の大草原を覆う煙とチラつく炎の光景はアフリカならではの感があった。この火入れによってブッシュを抑え、草を短く保って動物の姿がよく見えるようにするとか、観光サービスもよろしい。

散見される黒く立枯れた樹木は、野焼きよりもふえ過ぎた象が樹皮を食い、身体をこすりつけるせいとのこと。2~3 kmもの遠くから望見できる巨象の群に始めは子供のように喜んだが、やがて道端で悠々と草を食う親子連れにも驚かなくなる。野牛の群、ナイル川の河馬とワニの大群。クリスマス時期でもあり多数の白人客でホテルは賑わっていた。ただし、この地域は草の採種には全く遅過ぎ、僅かに川岸近くでサイノドンとローズグ

バスを得たのみであった。

セレレ農業試験場へ

12月27日17時カンパラ帰着。ここで加藤氏と別れ第2の目的地セレレに向かう。大型バスは超満員。最後部隅にやっと席を得たが、大きなリュックは膝の上である。色変りは目だち、たいていチャイニーズと見られる。ウガンダは国情から中国人とみられるのは好ましくないが、きかれもしないのに訂正するまでもない。それでも、黒い手で茄子とトウモロコシがつきつけられたり、バス旅行はいつも気楽である。

このバスは夜半1時、突然大音響大衝撃とともに急停止。仮眠の夢を破られた。車体も傾くはず、右後のダブル車輪がフツ飛んでしまったもの。よくまあ乗客に怪我のなかったものである。1時間ほどは成行きを待ったが、応急修理は到底不可能。最寄りの町へは10マイル。近くに電話のあろうはずもない。通りかかる車に救援連絡を頼むしかないが、その車も減速に通らない。通っても止まらない。どうやらあきらめの色の濃くなった所で、あきらめきれないせっかちは日本人である。道路の真中に立って車を止め、交渉の上バスの運転手を乗せてやった。替りのバスが来て発車したのは朝6時。今度は日本人に良い席が与えられた。以後は順調に11時頃めざすセレレに到着した。

この試験場にはEAAFR O東アフリカ農林研究機構のソルガム、ミレット試験地も設置されているが、突然の訪問でもあり、やや遠慮して牧草部門にしぼって、場長デービス博士と牧草担当者のハダリ氏らにご案内いただいた。ちょうどギニアグラスの採種をしており、地方在来種のコレクションではブッフエルグラスとシグナルグラスとが目だった。ここもゲストハウスに泊めてもらい、場長に食事までご心配願ったが、普通の来客は32km北、ソロチ町のホテルに泊るものらしい。GNP世界2位を思うといささか気のひけることではあった。場内外での採集はやや早目の適期、ソルガムなども代表的品種の分譲を受けて、翌29日午後に辞去した。

ナイロビへ

セレレからソロチはトラック便乗。ソロチからケニヤ国境近くのトロロまで150kmは乗合タクシーの乗りつぎで夕刻到着。ここからナイロビまで460kmは長距離バスによった。

夜10時頃国境通過。夜半エルドレットを過ぎれば、ナクルまでの間は海拔2,800m、赤道越えの国道である赤道直下でも高地の夜は寒い。うっかりリュックを屋根の上に積んでしまったので、半袖シャツ姿では眠ることもできない。隣の黒い若者とピッタリくっつきあって僅かに体温を保った。窓外に灯りは全く見えず、地平線に青白く輝く光は、やがて地平を離れ……やはり星であった。凄い星空を眺めてふるえながら夜明けを待つばかりだった。早朝ナイロビ着。

(以下次号)

